

— 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

仕事にせよ、遊びにせよ、私たちは何かにせき立てられるようにして、日々を過ごす。まるで自分自身を見失っている、ということにすら気付くことなく、毎日が過ぎてゆく。本来、自分のあるべき姿、人間らしい自分を打ち立てることのないまま、大切な時を過ごしてしまう。

(A) 何かの拍子で自分を冷静に見つめ直す機会に恵まれる時、「果して自分の行っていることは、人間としてふさわしいことだろうか。一体自分は何のために生きているのか。何に向かって生きていようとしているのか」——— こんなことを思い浮かべるに違いない。

このことに気付かないほど、私たちはオロカにつくられていない。たとえば、汽車の窓から次々と目に飛び込んでくる美しい景色に心奪われる人があ。しばらくそのカイカンに身をゆだねる経験は、誰にもあることだが、一体、その列車がどこに向かって走っているのか、そんな重要なことを忘れる人がいるだろうか。

私たちはこのことにまったく無関心なわけではない。この重要なことは頭から離れるかもしれないが、しばしば蘇える。そして、その度にうまく誤魔化してしまうか、もつと重要に見える何かの方が解決を急がねばならないと思ひ込み、こちらの方に取組むことは後まわしにしてしまう。

あるいは意識的に忘れてしまおうと努めさせする。(B) 、「まわりを見渡すと、みんなそんなつまらないことに拘泥することなく、平気で生活していることを見るからだ。もつと言え、自分を除いて誰もかれも、この問題についてすでに実にうまい解決の糸口を見出し、自分だけがまだそんなところに取り残されてどまつているように見えることを、非常に恐れるからだ。

《 中略 》

私たちは動物と同じように、ただ生きてゆくためだけでも、日々大変な労をあがなう。そのことだけでも、我を忘れるほどの努力を傾けなければならぬ。そのために、不思議にも、自分がこの世に生きていることさえ忘れがちである。そこからさらに進んで、何のために生きるかなど、よほど日々の生活からは遠いことに違いない。

そのような(我)中の生もまた人生であるが、それでは獣や植物のショウガイとそう変わらないとも言える。人間がただひたすら生きるだけのものであったなら、人間以外の生物と一線を引くことは意味がない。自分の生について冷静に見渡すことができはじめて、人間の生はそれらに比べて際立つのだ。

自分の生について改めて確認を行う機会はしばしば訪れる。何かのことで九死に一生を得たとき、あるいは恋愛の感情に燃えた時、親しい人の死にノゾんだ時など様々にあるに違いない。しかし、そのような機会は、他の獣の場合でも、恐らくしていることかもしれない。人間はそれ以外にも、強いて自分の生きてあることを確認し、しかも進んで生きている意味を探ろうとするように創られている。そこに私たちの優れて他の生き物と一線を画す意味があると云ってよい。(佐藤典司『文化の時代』を生きるために)より)

【語注】 拘泥する …………… こだわる。

労をあがなう …………… 苦勞する。

問一 ——— 線部ア・ウ・オ・キを漢字で書き、イ・エ・カ・クの読みをひらがなで書きなさい。

問二 ( ) A・Bに入る最も適当な言葉を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア さて イ けれど ウ また エ なぜなら オ そして

問三 ——— 線部あゝえのうち、他と意味・用法が異なるものを選び、記号で答えなさい。

問四 ——— 線部1と同じ構成の三字熟語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 社会性 イ 不平等 ウ 最先端 エ 上中下

問五 ——— 線部2が直接修飾する言葉を一文節で答えなさい。

問六 ——— 線部3とはどういう状態ですか。文章中の言葉を用いて五十字以内で説明しなさい。

問七 ——— 線部4・7はそれぞれ何を指していますか。4は文章中の言葉を用いて書きなさい。7は文章中より抜き出しなさい。

問八 ——— 線部5の( )に同音の漢字一字をそれぞれあてはめて四字熟語を完成させなさい。

問九 ——— 線部6とはどうすることかをくわしく説明している一文の初めの四文字を書きなさい。

問十 ——— 線部8・9の意味として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

8  
ア 何回も死にそうない目に合った  
イ 死にそうない状況の中で生きた  
ウ もう少しで死にそうないところをやっと助かった  
エ 多くの人が死ぬ中で、自分だけが助かった

9  
ア 他と一緒に行動する  
イ 他との区別をはっきりさせる  
ウ 他と全く異なることを計画する  
エ 他に例のない新しいことをする

問十一 本文の内容と合うものはどれですか。最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 私たちは自分を冷静に見つめ直すための機会を常に探し求めている。

イ 私たちは自分自身を見失わないために、毎日大変な苦勞をして生きている。

ウ 人間は日々の生活の中で、生きることの意味を探ろうと努力しなければならぬ。

エ ただひたすら生きようとするのが、人間にとっても動物にとっても重要である。

問十二 線部「〜てはじめて」を用いて、短文を作りなさい。

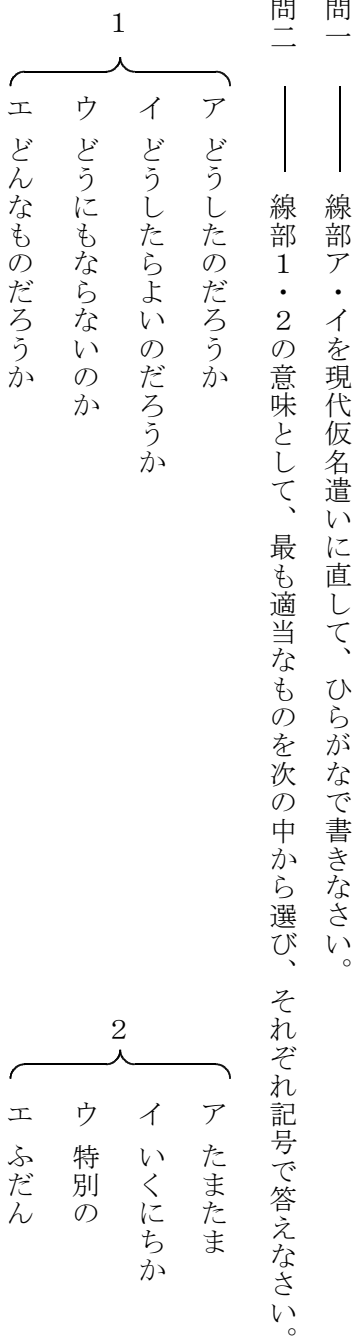
一 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

西郷市左衛門といへる人の母儀、鼠を飼ひて寵愛せしが、いかゞしけるや、かの鼠、右母儀の指へ食ひ付きしが、殊のほか痛み腫れければ市左衛門立寄りて、「憎き事や。畜類なればとて日ごろの寵愛をも顧みず、かゝる愁ひをなせる事こそ不届きなれ」とて、打擲<sup>4</sup>なしければ逃げ失せぬ。その夜母儀の夢<sup>5</sup>にかの鼠来りて、右指へ白躑躅<sup>6</sup>の花を干したるを付くれば、立ち所に鼠毒を去りて癒ゆる由をのべて、右白躑躅の花を枕元に置くと見て夢覚めぬ。驚きさめて枕元をみれば、ありし鼠は死して白つゝじの花をくわえ居けるゆゑ、右花を指の痛みにつけしに、たちどころに腫れ引きて快くなりしとなり。

(根岸 鎮衛『耳袋』より)

【語注】 かゝる愁ひ……………このような心配。

打擲……………打ちたたくこと。



問一 線部ア・イを現代仮名遣いに直して、ひらがなで書きなさい。

問二 線部1・2の意味として、最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- 問三 線部3を具体的に表している箇所を文章中より抜き出しなさい。
- 問四 線部4・6の主語にあたるものを次の中から選び、記号で答えなさい。
- ア 市左衛門      イ 母儀      ウ 鼠      エ 役人
- 問五 線部5の内容について書かれている箇所を文章中より抜き出し、その初めと終わりの五文字を書きなさい。
- 問六 線部7に対応する語句を文章中より抜き出しなさい。
- 問七 線部8について、なぜ鼠は、つつじをくわえていたのですか。鼠の気持ちを考えて、その理由を答えなさい。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

今、オランダの町ハーグの夜明けに、このノートの一頁にペンをおろそうとは夢にも思わなかった。わずか十日前には世界のどのあたりにハーグがあるのかさえさだかではなかったのに、高橋さんから「フェルメールを観に行きませんか」とおさそいをうけ「ええ、参ります」とごく自然におこたえて、三日後のきのう関西空港を旅立ったのだ。

フェルメールには昔から心ひかれていた。あの淡いクリーム色の衣裳をきて、手紙をよんでいる少女、そこに光がとどまっているような絵を思い出す。一カ月ほど前片桐さんからフェルメールの絵はがきで、今世紀最後のハレー慧星のような展覧会というこの展覧会の素晴しさを伝えていただいたこともあって、「もう決り」<sup>3</sup>という感じだったのだ。

関西空港を飛び立って十一時間、眼下のアムステルダムは水、水、田園の細い道はすべて運河だった。水の中に田園があり、水際に赤いレンガの家が立ち並ぶこの国の人々が、どんなに水に苦しみ、水を受け入れて親しまざるを得なかったか、はじめて訪問する国を機上からみてこのように<sup>4</sup>ことを思うのは、礼を失するかと思ったが、何か切実な思いがまず胸に來た。

この国の第一印象は水だった。

ハーグの列は乗る人、降りる人もまばら、時間が鉛のように、——とまではいかないが、たしかにゆったりとのびのびして、いそぎ足の人ばかり<sup>5</sup>たたくてもみられない。

私の背中も一センチのびたようだ。

陽は午後五時というのに、楡の梢にきらきら輝いて、小さな葉が無数に五月の風とたわむれている。大地すれすれの川、しなやかな草達が、暗緑色のリボンのふちどりになって、川を飾り、川が草々をまもり、草々は川をいとしみ、よろこび合<sup>6</sup>つてうたつてでもいるようだ。それが私の胸にしみてくる。オランダの田園は異国の旅人にこんなにもやさしさをはこんでくれるのか。空から見た時、白い鳥が草原に一ぱいいると思ったが、それは羊だった。牛もいる、小馬も小羊もいる。田園に点在する小さな家々の窓は明けっぱなし、白いレースのカーテンがゆれている。都会に近づけばビルやホテルがあるとはいえ、あまりに日本の都会とはちがう。何を守り、何を捨ててきたのか、オランダは日本と違う方向に文化を求めたのではないか。日本の繁栄がながく暗い思いを呼びおこす。

(志村ふくみ『母なる色』より)

問一 —— 線部1「フェルメール」は、オランダの画家ですが、作者にとって特に印象深い絵はどんな絵ですか。文章中より抜き出し、その初めと終わりの六文字を書きなさい。

問二 —— 線部2の対義語を漢字を使って書きなさい。

問三 —— 線部3とありますが、①何が「もう決り」なのですか。また、②そのきっかけとなった事柄を二つ、それぞれ文章中の言葉を用いて十五字以内で答えなさい。

問四 —— 線部4は、どこを指しますか。文章中より抜き出し、その初めと終わりの六文字を書きなさい。(句読点は含まない)

問五 —— 線部5のように作者が感じたのは、どうしてですか。その理由となる一文を文章中から抜き出し、初めの五文字を書きなさい。

問六 作者(私)は、文章中で自分のことを他の言葉で表しています。抜き出しなさい。

問七 —— 線部6に用いられている表現法を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 体言止め

イ 倒置法

ウ 反復法

エ 擬人法

四 次の漢字を楷書で書いた場合、第九画目が同じ筆使いになる漢字を、それぞれ番号で答えなさい。

1 道 2 浅 3 静 4 粉 5 博